

中世初期神道思想の形成

—『中臣祓訓解』・『記解』を中心に—

岡 田 莊 司

神道の理論的形成は、古代末期の律令的秩序の崩壊と価値大系の変動に起因する仏教革新運動の一環として位置づけられる。

慈円は古代末期の「保元以後ノコトハ、ミナ乱世ニテ侍レバ、ワロキ事ニテノミアランズル」(『愚管抄』 卷第三) とのべ、末法・濁世を現実の世界に認識し、危機意識の上に立つて、新たな統一的思想を形成して行く。慈円も摂関家出身の高僧にて、これら古代社会の解体の中で、中世思想を形成していく担い手は、貴族・僧侶らの知識人・専門文化人で、武士・農民には未だそこまでの意識の成長は認められない。¹⁾

初期神道理論の展開は、まず天台・真言の仏教哲理による解釈から試みられるが、これを押し進めていったのは僧侶であり、はじめは仏家側により神道が思想的展開を遂げることになる。そこには貞慶の『興福寺奏状』にみられるような高僧の危機意識が出発点となり、末法終末観の超克を意図して両部神道が生み出される。これと相応・継受した度会神道は、古代の国家体制の崩壊の中で、神社制度も変質を余儀なくされ、経済基盤を失いつつあった神官層の危

機感が、神道説の組織化へとつながっていったといえる。神官層が神道を理論的に体系づけるにあたって、国家体制の枠内にあった神道は、儀礼面ではより厳重な祭祀の執行が行われていたとしても、理論的には何の組織されたものを持ち合わせておらず、仏家の手により理論組織化された両部神道の思想を継受するしか方法はなかった。両部神道初期の著作『中臣祓訓解』及び異本の『記解』が、度会氏の「最極秘本」とされ、行忠・常良(昌)に伝えられているのはその典型であり、本書は度会神道に余すところなく吸収されてしまった。

本稿では、度会神道成立以前の初期神道思想の形成期に焦点を置き、その時期の代表的著述である『中臣祓訓解』(『記解』)を通して、その思想展開を明らかにしてみたい。

二

神道思想の初期的展開が、天台・真言の高僧の教学研究から生み出されたが、この神道への接近・傾斜の過程で、仏家側は神道に伝えられた仏法禁忌の伝統にどう対処したのであろうか。ここで特に問題となるのは、仏法の忌詞である内七言(『延喜斎宮式』)を伝

え、仏法禁忌を蔽として守り伝えた伊勢神宮においてである。

無住の『沙石集』は卷一に、神明に関する十編の説話を載せるが、その巻頭に「大神宮御事」と題して、

去弘長年中、太神宮へ詣テ侍シニ、或社官ノ語シハ、當社ニ三寶ノ御名ヲ忌、御殿近クハ僧ナドモ詣デヌ事ハ、昔此國未ダナカリケル時、大海ノ底ニ大日ノ印文アリケルニヨリ、太神宮御銚指下テサグリ給ケル、其銚ノ滴、露ノ如ク也ケル時、第六天魔王遙ニ見テ、此滴國ト成テ、佛法流布シ、人倫生死ヲ出ベキ相アリトテ、失ハン為ニ下ダリケルヲ、太神宮、魔王ニ會給テ、ワレ三寶ノ名ヲモイハジ、我身ニモ近ヅケジ、トクヘ歸リ上給ヘト、誘ヘ給ケレバ、歸ニケリ、其御約束ヲタガヘジトテ、僧ナド御殿近ク参ラズ、社壇ニシテハ、経ヲモアラハニハ持ズ、三寶ノ名ヲモタズシク謂ズ、佛ヲバ立スクミ、経ヲバ染紙、僧ヲバ髮長、堂ヲバコリタキナドイヒテ、外ニハ佛法ヲ憂キ事ニシ、内ニハ深ク三寶ヲ守リ給フ事ニテ御座マス故ニ、我國ノ佛法、偏ニ太神宮ノ御守護ニヨレリ。

と、三宝を忌み、社殿に僧徒を近づけない理由に、天地開闢以前、大海の底に大日の印文があり、やがてこの国が仏法流布の国となることを察した第六天の魔王が妨害しようとしたところ、大神宮は魔王をあさむいて、仏法を忌むことを約束したという第六天魔王伝説をあげている。これは無住が弘長年間（一二六二—一二六四）に伊勢参宮した折の神宮祠官からの聞書であつて、内外宮の荒木田・度会祠官にまで、仏法禁忌の伝統の中で、実は仏法が太神宮を擁護するとの伝承が流布していた。第六天魔王伝説は通海の『太神宮参詣

記』にもとりあげられるが、通海は「此事大キニ信シカタシ」とのべ、「伊佐奈岐尊、此國ノ王トシテ、天下ヲシロシ召テ、自ラ作り出シ給ヘル國ヲ、天ニツノ主シナシ、何ノ故ニ、第六天ノ魔王ニ乞請ケ給ヘキヤ、モトヨリ他人ノ國ニ非ス、銚ノ滴ヨリ始テ造リ給ヘル神國也」と日本書紀と異なる点に疑いをもち、「佛法忌セ玉ヘト申事ヲホツカナキニ依テ、何レノ文ニ注セル事ニヤト、普ク尋訪シカトモ、只申シ傳タル事ニテ、注セル文ハナシトゾ、」と文献での明証はなく、単なる伝承にすぎないとの否定的見解に立っている。ところが、この魔王伝説は、『記解』に「嘗天地開闢之初、神寶日出之時、法界法身心王大日……現化權之姿、垂跡闍浮提、請_レ府璽於魔王、施_レ降化之神力……忝大神外顯_ニ異佛生威實執教之儀式、（『訓解』は「外顯_ニ異佛教_ニ之儀式_ト」）、内為_レ護佛法之神兵_ト」とあり、同じく貞麿作と伝える両部神道の『神祇講式』にも、「凡從銚滴成嶋、當初吾國大海之底有_ニ大日如來之印文_一、此仏法流布之瑞相也、第六天魔王為_ニ障礙_一、仏法欲_レ令_ニ無國土_一之時、天照太神請_ニ神璽於魔王_一、天地開闢以降、（取意）八百萬神達、外顯_ニ異佛教_ニ之儀式_ト、内為_レ護仏法_ニ之神兵_ト」とみえ、初期の両部神道書に引かれている。してみると、これは仏家側が両部神道の形成過程で偽作された伝承ではなかったか。仏家が神道、とくに最高最貴たる伊勢の天照大御神を習合あるいは解釈するにあたって、仏法禁忌の伝統は全く相い容れない論理であつた。仏徒の神宮参宮が盛んになるにおいておやである。そこで仏法禁忌の伝統を「外顯_ニ異仏教_ニ之儀式_トと表面上に把え、この認識下に、その本質を「内為_レ護仏法_ニ之神兵_ト」であつたと主張したのであつた。それは通海

が指摘したように全く根拠のない、荒唐無稽の飛躍した内容であったが、このような初期神道思想の展開期に仏家側が手段として偽作したことは注目される。『訓解』には見られぬが、その異本『記解』の冒頭には、「惟垂跡本地頓成感応也、神祕必有驗、頭露被不信、准密教道理、察大日經誠、外異仏教名、内護仏法理」とあるのも、右と同じ理解にはじまる。それは方便以外のなものでもなく、仏法禁忌は、たやすく克服され、ここを起点に新たな思想展開がみられてくる。

伊勢の祠官によって、仏家側により方便として偽作された第六天魔王伝説が語られていることは、仏家神道・両部神道が、度会神道成立以前に、すでに荒木田や度会神主に浸透していたことを窺わせ、度会神道成立の思想基盤もここにあったことが理解できる。しかし、仏家神道の理論を度会神道が継受していても、第六天魔王伝説を全く度会神道書がとりあげていないことは、初期神道思想とは劇然の違いがあり、度会神道が仏家神道から脱皮し、独自の神道論を明示しようとした意図の表われと考えられる。

三

次に、『訓解』・『記解』が著述された中世初期における、僧侶の神道理解のあり方について触れてみることにしたい。

神道への傾斜は、慈円・公頭・貞慶・重源らの高僧に顕著にみられた事象である。慈円は「まことに神そ私の道しるへ、跡を垂くとは何故かいふ」(『拾玉集』第二)と詠んで、神明の存在を重くみているが、これは建仁三年(一一〇六)六月二十二日晩に、三種

神器の一、神璽についての奇夢を見、これを夢記として書き記し、後鳥羽上皇に進覧したのをはじめとする。この時、上皇からの仰せで、はじめて日本書紀を読み、真言秘密の奥旨を明らかにするに当たり、伊勢大神宮が男女の両身に現容するという神道の所伝を得るに至った。夢想記には「今此證據在神道、……凡其文相、甚以難得其意、文義甚深如佛教也」とのべて、神道の神秘的境地を体得し、これまでの頭密教理の思索から一歩進めて、日本の古典から現実の世界を思索する方法を知ることができた。『愚管抄』の著述も、これを契機に醸成していったものであり、慈円の生涯の転機となった。この神道の所伝の会得から、伊勢参宮を思い立っており、これら高僧の神道への傾斜が、まず、個人的な内面の思索の変化から出てくることに気づく。それは高度の頭密教学の研鑽に専念した高僧のみが到達しえた思索境地であった。したがって、初期の神道理論が一部高僧の口伝として師の内的体験を直接弟子に伝授されていくことにもなる。

もちろん、彼ら高僧の分離解脱への道が、当時の社会不安に起因する危機意識が背景にあったことは明らかで、平安末期の保元・平治の乱から治承・寿永の内乱と、うちつづく乱世が、彼らの内的な意識の変化を左右したといえよう。

のちに鎌倉仏教革新運動の中心となる法然は、安元元年(一一七五)自力聖道門を捨て、本願他力の浄土門に入り、専修念仏を主唱するようになるが、同時期(『園城寺伝記』に「安元三年頃」とある)に本覚院公頭が神明により分離解脱をめざしたことは注目される。公頭は第三十五世園城寺長吏に補任され、のちに天台の最高

権威者たる座主の地位に就任し、「顕密ノ明匠」といわれた人物である。『沙石集』巻一、「出離ヲ神明ニ祈事」の条によれば、公頭は日本国中の大小諸神の御名（『園城寺伝記』には「日本国中大小神祇三千余座」とある。延喜式神名帳所載の神名であろう）を書き、毎朝、一間の帳に勧請し、淨衣を着し幣を持ち、礼拝をしたという。

この神道儀礼の所作を不思議に感じた高野山の明遍僧都は善阿を公頭の住房に遣して、その理由を問うに、公頭は「我身ニハ、顕密ノ聖教ヲ学ビテ、出離ノ要道ト思計フニ自力ヨハクシテ智品アサシ、勝縁ノ力ヲ放レテハ、出離ノ望解ガタシ、……出離ノ道偏ニ和光ノ方便ヲ仰グ外、別ノ行業ナシ」と答へ、「サレバ他国有縁ノ身ヲ重シテ、本朝相応ノ形チヲ輕シムベカラズ、我朝ハ神国トシテ大權アトヲ垂レ給フ、又、我等ミナ彼孫裔也、氣ヲ同スル因縁アサカラズ、此外ノ本尊ヲ尋ネバ、還テ感応ヘダムリヌベシ、仍機感相応ノ和光ノ方便ヲ仰テ、出離生死ノ要道ヲ祈申サンニハシカジ、サレバ、和光同塵コソ、諸仏ノ慈悲ノ極リナレト信ジテ、如此行儀異様ナレドモ、年久クシツケ侍也」と語っている。それは偏に和光の方便を仰いで往生を願ったもので、神道の勝れて尊きことを悟ったのである。神明による出離解脱を目ざしたことは、単に公頭が神祇伯家に出自したというだけでなく、当時の社会世相、とりわけ末法的終末観の超克を意図したものであった。その背景に中古天台において広められた本覚思想に根ざしていたことはいうまでもない。本覚思想は絶対肯定の思想で、現実の事象そのままを絶対とみなし、衆生はすべて本来仏性を有すると考えた。したがって仏・菩薩の垂迹として現われた神こそ仏の本地たるべきものすなわち神本仏迹・本下

迹高・神勝仏劣であると論ずるようになる。公頭が本高迹下のうちの、迹下たる神に出離を祈誓したのも、迹下の神こそが翻って本来の覺性の顯現した姿と認めたからにはかならない。公頭が「本覺院」・「本覺房」と称していたのも、この本覚思想をもって、彼の仏教哲理の根幹としていたものというべきであろう。

しかし、公頭のように迹下の神に絶対的価値を感得するのは、中世初期にあつては、一部の高僧のみに限られ、一般の人びとには「云レ佛云神、無異無別」と、神仏同体が一般の通念で、神仏の優劣を認めてはいない。のちに通海は『太神宮參詣記』に「天照太神ハ神道ノ主、大日如来、法花ハ仏法ノ主也、垂迹ト云、本地ト云、無上也、無比也、此理リヲ知テ神明ニモ仕ヘ、真言ヲモウカムヒ給ヘキ也」とのべているが、これも本地の仏と垂迹の神を無上・無比の優劣なしとみており、神本仏迹には至っていない。

では、当時の数少ない文献化された『訓解』・『記解』はどうであつたか。本書には魔王伝説につづいて、神仏について「雖ニ内外ノ詞ハ異ナリト、同ニ化度ノ方便ヲ、神ハ則諸佛ノ魂、佛ハ則諸神性ナリ也」と神の優位をのべているようにも見えるが、「肆ニ經曰、佛ハ住ノ不二ノ門ニ、常ニ神道ニ垂迹スト云。惟ニ知。以ニ諸神ノ通力ヲ令ニ顛倒ノ衆生ヲ、以ニ所求ノ願力ヲ、令ニトナレ入ニ於佛道」。此則善巧方便、大慈大悲ノ之實智、色心不二、平等利益之本願ナリ也。」と、所詮は衆生が仏道へ入るための方便として神の存在を重視する立場であつた。少なくとも本書からは神本仏迹を明確にした内容には至っていない。が、このことから、本書が、統一的な思想大系のもとして著述されたものではなく、かなり早期に著作されたであろう

ことを推定できよう。

四

『訓解』及びその異本『記解』は「准ニ密教道理」、察ニ大日經「誠」(『記解』)として、「聊託ニ覺王ノ之密教」⁽⁷⁾、略示ニ心地ノ之要路」したものである。本書は弘法大師空海の撰に仮託されているが、両本の奥書から伊勢神宮の法樂寺院仙宮院を管掌する本覺院公願も住していた園城寺の住僧の手に成ったものと推定される。その成立年代も『訓解』が建久二年(一一九一)、『記解』が建保五年(一一二八)以前に遡ることができ、凡そ平安末期、遅くとも鎌倉初期には著述されていて、初期の神道理論を考察していく上に好個の史料といえる。

周知のとおり中臣祓は、延喜祝詞式に収める六月・十二月晦日の大祓詞に起源をなし、文武百官を集めた朝儀としての二季大祓行事は宣読の形式になる公的行事であったのに対し、これを奏申の形式に改め、私的に人びとによつて唱読されたものである。大祓詞は中臣氏がこれを讀唱し伝えたことから、中臣祓ともいい、中臣祭文・大仲臣経などと呼ばれて世間に流布し、盛んにその功德が宣伝せられた。とくに、平安時代以降になると、陰陽師や仏家に伝わり、咒咀・反逆・病事・産婦のために修せられている。『阿婆縛抄』に収める河臨法には、「穢自唐度^レ云事、自古兒女子之説也」、「況吉備大度^{シタルコト}世以所^レ知也」と中国からの請来物であったとの一説を伝えており、穢という本来、日本的な習俗・信仰とみなされていたものが、仏家・陰陽道家らによつて、中国渡来の習俗・信仰で

あると宣伝された。⁽⁷⁾ 穢は宮中や神社の祭祀に蔽として執り行われきたのであったが、これを最下層の人びとにまで伝えたのは、仏家・陰陽道に属する人びとによつてであり、兒・女子らの人びとも深く中臣祓に浸透していった。

早く、六字河臨法の密教行事に中臣祓は導入されていたが、これを更に神道の中臣祓を理論的にとりあげ、注釈を試みたのが、『訓解』・『記解』であった。

この中臣祓の効用については、通海の『太神宮參詣記』に「末法ニイタリテハ、只教ノミアリテ行モナシ、證モナシト申ス、時分ノ奢多ステニモチテ如此、次第ニ佛法モ衰微シテ世間モ澆季ニ及ヘリ、行證ナクハ神ノ納受モイカ^レ侍ラム、僧云、中臣祓昔ヨリ今ニ嚴重ノ事也、人ノ罪トカラ滅スルコト左右ニ不及、……シカルヲ此中臣祓ノ功能ヲモチテ、萬ノヲカシアヤマチアリトイフトモ、シナトノ風ノアモノヤエ雲ヲフキハラウカコトク、ツミトカラネノ國ソコノ國ヘナカシヤリタマエト申セハ、昔ヨリ今ニ懺悔ノ減罪ノ法タカフ事ナシ」とのべて、仏法の衰えた末法にあつても、中臣祓の功能をもつてすれば罪咎も減すると強調し、中臣祓の末法適應性を主張した。

五

では、仏家側は中臣祓をどのように把握・解釈したのであろうか。以下に引用する『訓解』・『記解』は、特記しない限りは、天理図書館本「中臣祓記解」を底本とした校訂本(『西田長男博士古稀記念神道史料集』収載予定)に拠っている。

本書は、まず和光垂迹の起りを、「雖^レ載^二国史家牒^一、猶有^レ所^レ

遺、靡^レ識^二本意^一」とのべ、記紀以下国史の解釈だけでなく、「託^二覺王^一之密教^二、略^二示^二心地^一之要路^二」したことを強調する。初期の神道理論が密教的解釈に拠っていることを本書はその冒頭に明言しており、中世神道思想の形成が、ここから萌芽していったことに留意すべきであろう。そして中臣秋は、「天津祝太祝詞^{トホノミコトノコト}へ伊弉諾^{イサノ}尊之宣命也、天兒屋根^{アメノイサノ}命之諱辭也^{ナメノコト}」と、国史家牒に載せる説をあげ、更に「是則己心清淨儀益、大自在天^{ダイジザンテン}・梵言^{フンゴン}、三世諸佛^{サンセシュツブツ}・方便、一切衆生^{イツセツシュジョウ}・福田、心源廣大^{シンゲンコウダイ}・智恵、本来清淨^{ホネラウキヨウ}・大教、無怖畏^{ムフウイ}・陀羅尼^{ダラニ}・罪障懺悔^{ズイシャウザンケ}・神呪、寔最勝最大^{ジツサイショウダイ}・之利益、無量無邊^{ムリョウムベン}・之清淨、世間出世^{セカントウ}・之教道、拔苦与樂^{ハツクヨク}・之隱術也^{インジュツデ}」と仏説をあげている。この中で「己心清淨儀益」とか「本来清淨大教」と清淨を強調する字句は、本書に頻繁にみられる。

「大麻躰相者、自性清淨之三摩耶」

「解除ノ事^ハ、以^二神秘^一・祭文^ヲ、諸^ノ罪咎秋^ヒ・清^ヲ、即歸^二阿字本不生^一之妙理^ニ、顯^二自性精明之實智^一。而^ニ於^二諸法^一者、不出^二清淨^一・之^二一^一。故有^二爲^一・不淨^一之實執也。無^レ爲^一・清淨^一之實體也。是則吾^レ心性也。修^レ・禪定^一・ヲ、漸^ニ・成^二清淨^一。」

「經曰、己^レ心念清淨、諸佛在^二此心^一云々。清淨^ハ則己心清淨之智用、寂靜安樂^ノ之本性也。」

「罪障懺悔文也。無漏清淨之法益也。諄辭也。自性意觸法。」

（「法別」の注釈）

中臣秋によって罪穢を祓つたとき、そこに清淨が生じてくることは神道信仰の本質でもあったが、本書では、この清淨をことごとく仏説から解釈することに特徴をもっている。

度会神道の伝書の一、行忠撰『伊勢三所太神宮神名秘書』に「解除云 上起^二伊弉諾尊^一・下施^二于天兒屋命^一・是則心源清淨之儀益、故顯^二自性精明之實智^一、是則假體不淨之懺悔、故歸^二無爲清淨之本源^一」とあるのは、『訓解』・『記解』からの要約と考えられ、他の度会神道書に、しばしば清淨が強調されるのには、神道そのものの中に清淨が重視されていたほかに、この『訓解』・『記解』の影響によるところが頗る大きい。

ところで、この清淨観が、平安末期頃に盛んとなっていた天台本覚思想に依拠していたことが注意されよう。「本覚」の語が初見する經典の一つ、不空訳『仁王般若經』には「自性清淨名^二本覚性^一、即是諸仏一切智智、由^レ此得^二爲^一衆生之本^二」（本行品第三）と、自性清淨を本覚の性とする。不覚・始覚に相対して本覚が説かれるようになる『大乘起信論』では、本覚とは自性清淨心の本性の智慧をいい、これを本覚の作用、働きを示す随染本覚と、本覚の本性が清淨にあると、その本質・体を示す性淨本覚との二面のあるのを説く。そして「是心、從^二本曰来^一、自性清淨、而有^二無明^一。爲^二無明^一所染有^二其染心^一。雖有^二染心^一、而常恒不變。」と、衆生心は、その本性からして自性清淨である。ところが、現実には染心、すなわち煩惱に汚れた、無明によって生滅心となった心が存し、迷いの境地にあるが、その心性は常恒不變であるという。衆生の本性が本来清淨であることは、のちに本覚は衆生に即した覚性とされ、日本天台の本覚法門では、さながらに仏となる、衆生即仏が唱えだされてくる。『訓解』・『記解』では、「天之益人」すなわち衆生・凡夫の犯した雑々の罪事を、中臣秋によって解除すれば、本来清淨とな

り罪穢も除去される。中臣秋は罪障懺悔の神呪であり、それは懺悔することにより、清浄となり、仏となることであった。「皆是無始之一念、無明貪慾、煩惱穢也。故貪慾懺悔而、即向「佛智」矣」(「己子犯罪」の注釈)、「已上所讀罪、謂、依「煩惱愛」、受「變易生死」因緣、或為「父母妻妾子」、或為「兄弟姊妹」、若為「天魔外道」、若為「餓鬼禽獸」。自始至今、更生代死。排「煩惱塵勞」之門、「宿」六道四生之闇。轉變無定。圓「滿善行」、拔「濟四恩」、修「懺悔法」、歸「一心理」、佛与無異。故則我心、衆生心、佛心、三無差別。我意即清浄也。我意即寶篋也。」と、懺悔を修すれば、我も、衆生も、仏と同じく差別なき絶対境地に入ることができた。それは「罪障懺悔神呪」である中臣秋の効用によるものであった。

清浄は、更に「天津宮事」の注釈において『金剛頂經金剛界大道場毘盧遮那如來自受用身内証智眷属法身異名仏最上乘秘密三摩地礼懺文』にある清浄偈を引き、

諸法如「影像」。清浄無「取穢」。取説不可得。皆從「因業生」。神宣命也。祝詞也。謂、宣之即一心清浄、常住圓明義益也。是修「淨戒波羅蜜多」。觀之。不可得妙理。

とある。『金剛界礼懺』に「白衆等各念、此時清浄偈、諸法如「影像」、清浄無「取穢」、取説不可得、皆從「因業」とあるのを「訓解」が引き(「記解」はこの清浄偈を脱している)、ここから『天地靈覺秘書』・『倭姫命世記』・『諸教集』(尚重解除鈔)・『三所太神宮神名秘書』・『大元神一秘書』・『類聚神祇本源』・『大日尊神中臣秋天津祝太祝詞文傳』など、阿部・度会神道書に引かれてくる。清浄偈は、『天地靈覺秘書』には「本来清浄咒」といい、こ

れを「天兒屋根命祝詞」としていることは、『訓解』の注釈に依拠したものであろう。天理吉田文庫本・国学院梵舜本『記解』には「不可得妙理」につづけて、「無明即法性、煩惱即菩提」(「訓解」・『記解』阿本の異本でもある西田長男博士所蔵本は「天津宮事」注釈の冒頭に記載する)とあるのは、天台本覚思想において積極的に唱えられたもので、矛盾対立する無明と法性(真如、実相、法界)、煩惱と菩提が、そのまま即一であると見る。本覚思想は事象そのままを本覚の理とみなすことから、無明・煩惱もそのまま肯定し、絶対究極の境地へと至る。平安末期の作と推定される伝最澄撰の『天台法華宗牛頭法門要纂』には、「煩惱菩提、是我一心名、生死涅槃、亦此指「心体」、……此心性本源、凡聖一如無二如、此名「本覚如来」と、生死即涅槃、煩惱即菩提、凡聖不二などの相即不二が盛んに説かれており、これら日本天台の本覚思想は、初期には秘授口伝として個々に伝授され、その時期は「個々の口伝法門は一世紀半ばの平安中期末ごろから伝えられていき、一二世紀半ばの平安後期末ごろには文献化が始まっていた」のであって「訓解」・『記解』の成立が平安末期と考えられることからして、本書は本覚思想の文献化に直接の影響をうけて著述されたものである。

本書は、鎌倉初期以前、平安末期に撰作された中臣秋注釈の本文(「于時弘仁十三年仲夏廿五日、沙門遍照金剛之伝」まで)と、鎌倉中期に増補された部分から成っており、『訓解』・『記解』では増補の部分が異っている。それは『訓解』・『記解』諸本の流布・伝授の差にはつきり認められるが、別稿で述べておいたので、ここでは再説しない。この平安末期著述の前半部(中臣秋注釈の本文)

に、「本覺」の字句の見えるのは一カ所あり、「天之益人等」の注釈に「凡世界自_レ本覺也。自_レ本無明也。本亦法界。本是衆生、本佛也」とあるのがそれで、この部分は『天地靈覺秘書』・『漢朝秘起在三月三日上巳』にも引かれる。天之益人（凡夫・衆生）の住む世界は本覺であり、無明即法界、衆生即仏に通じる解釈を展開されており、本覺思想は本書の隨所に色濃く投影されている。

鎌倉中期に増補したと思われる追記には、「凡_ニ天神地祇一切諸佛、惣_ニ三身即一_ノ本覺如來、皆悉一_ニ鉢_ヲ無_ニ二也。……故則伊勢岡宮者諸神之最_ニ貴_ニ。異_ニ于天下ノ諸社_ニ者也。大方神在_ニ三三等_ノ。所謂一_ニハ本覺伊勢太神宮是也。本來清淨ノ理性、常住不變ノ妙鉢也。」と説いて、諸神を本覺・不覺・始覺の三等に分類し、伊勢岡宮を最高最貴の本覺絶対神とする。伊勢岡宮を諸社に異る最高神とする考え方は、度会神道において大いに唱導されるが、それ以前の両部神道において既に主張せられていたところで、平安末期成立の中臣秋「所聞食」の注釈にも「然則天照太神者、大日遍照尊、諸尊最貴者也」と述べ、日輪を天照皇大神、月輪を豐受皇大神の両部不二と説く。伊勢岡宮を胎金両部不二とするのには、金沢文庫本『天照大神儀軌解』に「内宮者胎藏界七百餘尊_ヲ、外宮者金剛界五百餘尊也」とあるのをはじめ『天地靈覺秘書』などの両部神道書にしばしば引かれており、平安末期には伊勢を両部不二の絶対神とする思想は成立していた。これに神を分類してくるのは、更にのちのことで、浄土教阿弥陀信仰に覆われていた石清水八幡を始覺と名づけ、「流轉之後、依_ニ佛説經教_ニ、無明眼_ヲ覺_テ、本覺理_ニ帰_ス」もので、「非_ニ本覺本初元神_ニ」と本覺絶対の最高神たる伊勢岡宮と差別する。

『訓解』は、これまで弘法大師空海の撰に仮託されてきたことから、真言系僧侶の手に成ったというのが定説であった。『記解』に「察_ニ大日經誠_ニ」と真言密教が本書の構成の主要を占めていることは事実であるが、その上に天台本覺思想に覆われた解釈が一貫していることを注視すべきであろう。日本における本覺思想の端緒は、空海によってであり、『大日經開題』・『金剛頂經開題』には本覺の絶対化を主張しており、空海の真言密教に相応して天台密教が発展し、このもとで本覺思想も展開していくことになる。その意味で本書の成立の思想史的源流を空海に求めることも可能であるが、事実としては、本覺思想に影響をうけた天台寺門の園城寺に掌管された伊勢仙宮院の住僧、それも頭密・修驗を修得した在地僧によって著述されたものであらう。

六

中臣秋は平安時代に既に陰陽師・仏家によって民衆の間に浸透していた。したがって、中臣秋の読唱によって生じる功德も、人びとに広められていたのであって、本書にある「抜苦与樂_ノ隱術」、「消_ニ一期ノ苦愁_ヲ、而快_ニ百年ノ榮樂_ヲ」、「万福速來生」、「滅罪生善、頓證菩提_ノ隱術」とは、まさに苦悩にあえぐ民衆の願望を反映させていた。

当時隆盛していた浄土教は、個人の来世における救済を志向するもので現世否定の立場にあった。これに対抗する密教では、自教の末法適應性を主張し、神道の中臣秋までも受用し、両部神道説を唱導する。密教は来世往生とともに現世利益をも強調するが、神道に

おいては、「問、神明ニ帰シテ何ノ利益有ルヤ。答、遠近ノ有ニ同益。近ハ垂迹ノ利生ニ依、今生安穩ナリ。遠ハ本地誓願ニ依、後生善處ナリ」(『神道集』「神道由来之事」)と、垂迹神明の利益は今生現世にあり、神道が密教によつて習合されると、現世利益はより一層強調されてくる。『訓解』・『記解』は、「定知是ノ人ハ、持三世諸佛ノ智慧、得二世ノ所求圓滿」。不可説、不可説。」と、現当二世にわたっているが、中臣秋注釈の最後に、「為一切衆生、施一子慈悲、以諸尊願海、洗三生死穢泥。阿字本不性故長寿延命也。本記云。……秋、此不死藥、故能治万病」と、長寿延命という現実の問題が説かれている。

仏家、とくに密家が神道論を展開させるにあたつて、仏教では輕視されていた現世利益的功徳を表面化させていくことは、浄土の新仏教に対抗していくためにも、有効な手段であつた。罪障懺悔の呪文とされていた中臣秋は「一座ノ秋、百日之難除リ、百度ノ祭文ハ、千日ノ咎捨ッ」といわれるもので、他力易行門に属し、濁世の苦しみにあえぐ民衆に容易く受け入れられる内容をもっていた。このちに著述される両部・度会神道書が、民衆にとつて難解高度な理論であるのに比べ、『訓解』・『記解』は民衆に深く浸透していた十王信仰・地獄思想までもが入れられ、底辺にある人びとの願望が汲み上げられていることに特徴づけられる。

平安末の末法終末思想の隆盛期には、これを止揚するには本覚思想によるしかなく、神道思想の展開も、ここから出発し、末法適應性を主張し、末法終末觀を超克していく。『訓解』・『記解』は、

この時期の代表的著述であつたが、すべてが仏教の教説を借りて説明を加え、のちの神道理論に比べれば、全く未熟な理論展開に終始している。それは、ともかくも危機意識に立たされていた密教側が、神道の中臣秋により自ら救われ、人びとを救いたいとの願いが先行しており、高度の理論思考の結晶であると言ひ難い。むしろ仏家が神道の中臣秋をとり上げたところに意義を見出すことができる。これにつづいて著述される両部・度会神道書には、『訓解』・『記解』が盛んに引用され、度会氏にあつては「最極秘本」の座右書とまでされ、のちの神道思想へ多大の影響を与えている。中臣秋の解釈についても、吉田兼俱によつて秋研究が継受されるまでの中世全期を通じて、本書は中世神道思想史上、重い位置を占めていたことはいふまでもない。

註

(1) 大隅和雄氏「古代末期における価値觀の変動」(『北海道大学文学部紀要』十六—一)。この時代思潮の一つとなる末法思想についても、「武士とは関係のないものであり、まして農民とはおよそ縁がなく、公家貴族の社会において発生し成熟したところの危機意識」(家永三郎博士『中世仏教思想史研究』)との指摘がある。

(2) 『神祇講式』は鎌倉中期の撰作であるが、ここに「記文取意」と記されていることは、これ以前に魔王伝説を載せた伝書があつたことになる。ほかに建長七年(一二五六)以前成立の『漢朝秋起在三月三日上巳』にも「一書曰」として魔王

伝説を記す。

- (3) 赤松俊秀博士「慈鎮和尚夢想記について」(『鎌倉仏教の研究』)

- (4) 鎌倉遺文三四一四号、高田専修寺文書。

- (5) 鎌倉遺文一八二五号、承元三年(一二〇九)大中臣時定施入状。

- (6) 拙稿「中臣稔訓解及び記解の伝本」(神道及び神道史二七号)。「西田長男博士古稀記念神道史料集」所載の「中臣稔記解題」(統群書類従完成会、明春刊行予定)。

- (7) 稔の習俗が日本・中国はもちろん世界の普遍的習俗であることから、その習俗化がはかられたことはいうまでもない。

『大祓詞』が仏典の『薬師如来本願功德経』と連関が認められることは、西田長男博士の指摘がある(「仏家神道の成立」『日本神道史研究』第一卷総論編)。

- (8) 天台本覚思想については、田村芳朗博士の一連の研究に拠っている(『鎌倉新仏教思想の研究』・「天台本覚思想概説」日本思想大系『天台本覚論』)。本覚思想が神道に及ぼした影響については西田長男博士の研究がある(「本地垂迹説の成立とその展開」『日本神道史研究』第四卷中世編上)。

- (9) 田村芳朗博士「天台本覚思想概説」(日本思想大系『天台本覚論』)。